教科指導への特配教員の活用を生かした小中連携の取組

桐生市立神明小学校

１　連携の基礎

桜木地区は、20年ほど前から子どもたちを取り巻く地域の環境を整え、地域の子どもを地域で育てるという趣旨の様々な連携が進められてきた。平成14年に始まった学校間［神明小･桜木小･桜木中･桐生南高校･(桜木幼稚園)］の連携は〈できることから 無理なく ゆっくりと〉を合言葉に、ゆるやかで地道な活動を続けてきている。昨年度からは、地域のバックアップ体制や児童生徒の実態等を斟酌し、小中３校の連携について、学力・体力の向上や中１ギャップの解消等に向けて、少し踏み込んだ取組を始めている。今年度は、桜木中が県教委から『体力向上モデル校』、神明小・桜木小が市教委から『教育課程特例校(英語科)』の指定を受けたことから、さらに連携のレベルアップを図り、教育の質を高めるための取組を行っている。

２　今年度の取組

（1）授業連携「教科指導」

本校は５.６年生が人数の多い単学級という点を考慮し、授業の改善充実を主体とし、桜木中の教員が本校の授業を応援する形態を取っている。具体的には、６年体育と５.６年外国語活動(英語)に、常時、桜木中に配属された特配教員がＴ２として加わり、体育は学級担任との２人体制、外国語はＡＬＴを交えて３人体制で授業を行っている。

何れも専門性の高い教科なので、教科の免許を持つ特配教員が授業に加わることで、児童への指導支援の幅が広がった。また授業について担任教師と打合せをしたり、話し合ったりすることで、より適切な指導方法や指導形態等が見つかり、授業の質の向上が図られている。授業に臨む児童の真剣な態度や楽しそうな表情からも、着実に成果が上がっていることが分かる。

さらに、卒業後は桜木中へ進学する６年生にとっては、名前も顔も分かる教師がいることは大きな安心感につながると思われる。また中学校にとっても、高学年児童の実態把握ができることで、単元構成や授業展開を考える上で有効と思われる。これらが、いわゆる「中１ギャップ」の解消へとつながっていくものと考える。

（2）桜木地区児童生徒の一貫した教育活動の共有化

５月に小中３校の担当者が一堂に会し、「学習ルール」や「生活ルール」の共通理解を図ったり、「家庭学習の進め方」を共有化したりする等、それほど無理をせずにできることを話し合う機会を設けた。今年度１年をかけて、３つの部会〈確かな学力育成部会〉〈豊かな心育成部会〉〈健やかな体育成部会〉で原案を作成し、それをたたき台に実践してみた結果を持ち寄り、随時改善していく予定である。